平成 22 年 7 月号

桂台地域ケアプラザ

地域交流プログラム

お問い合わせ先
地域交流部門
897-1111

【発行日】平成 22 年 7 月 1 日【編集・発行】横浜市桂台地域ケアプラザ【発行責任者】石塚　淳
HPアドレス:http://www.katuradai.com

先日、横浜市のある会議に出席していたら、「地域ケアプラザは子どもからお年寄りまで誰もが安心・安全に暮らす街づくりをする地域活動を支援するところでしょう？」「けれども、なかなか障害者の地域生活を支援する活動に関する講座や団体が少ないのではないでしょうか？」と疑問を投げかけられました。もちろんばらつきはあるのでしょうが、横浜市全域を見渡すと、ご指摘のような事があるかもしれません。ところがこの夏、ここ栄区では全 6 館のケアプラザが障害児の夏休みの余暇プログラム「さかえ・ほっとスクール」にかかわる事になりました。これは実行委員会の方たちの尽力のおかげ！（やっぱり、声をあげることが大事）ですが、みんなで盛り上げよう！という空気が出てきました。桂台ケアプラザでも 8 月 3 日と 4 日（料理を一緒に楽しんだり、街にお出かけをしたりします）に行います。つきましては、両日ともボランティアさんを大々的に募集しています。ボランティア活動に一歩踏み出して見ようと思う方は、ぜひ 897-1111 までご連絡ください。

おもちゃ文庫からお知らせ

7/24（土）～8/29（日）まで、夏休み期間となり、一般のご利用がお休みとなりますのでご了承ください。

龍先生の健康相談

ケアプラザの協力医で内科医の龍先生による、無料の健康相談を下記の日程で行なっています。身近な病気の相談など丁寧に対応して下さいます。（予約優先）

協力医：龍　覚先生（上郷医院　院長）
日　時：８/２７(金)
　　１３時半～１５時
場　所：桂台地域ケアプラザ　相談室

夏休み特別企画

“マジックショーが
やってくるよ”

みんなで楽しく
愉快なひと時を過ごしませんか？

日時：８月２５日（水）
　　１３：３０～１５：００
場所：桂台ケアプラザ多目的ホール
出演：いたちマジッククラブ所属
　　（金子　和男さん　他）
対象：幼児～小学生のお子さん
　　（未就学児は保護者同伴）

申し込みは電話か直接ケアプラザへ
※他にも楽しいサプライズがあるかも、、、。

地域包括支援センターだより vol.28

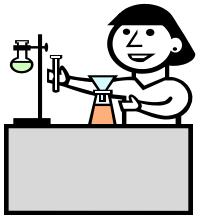
みなさん、
こんな記事
ご存知ですか？

セーフコミュニティさかえ　始動！！

いきいきと暮らすこと、それはあらゆる人の願いです。誰もが元気でいきいきと暮らし続けられるまちを、地域のみんなで実現するのが「セーフコミュニティ活動」です。その内容が認められると、WHO(世界保健機関)セーフコミュニティ協働センターから「セーフコミュニティ」として認証されます。栄区はそれを目指し、一歩を踏み出しました！これから地域のみなさまと一緒に進めてまいります。大切な命を奪う″傷害″は事故や自殺などによって起こりますが、発生原因やその背景を調査・分析することで、それらの多くは予防することができます。平成 20 年の区内の傷害による死亡者数は、事故が 32 人・自殺が 31 人でした。失われた命に思いをはせ、「地域の課題」としてみんなで再発防止に取り組み、人のまなざしが行き交う事故や自殺などを発生させないまちづくりを進めていきましょう。

栄区ホームページより

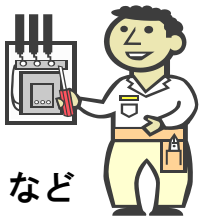
というわけでセーフコミュニティに我が栄区が名乗りをあげました。日本では平成 20 年３月に京都府亀岡市が、平成 21 年８月には十和田市がセーフコミュニティ認証を取得しており、世界では 159 の地域が認証を取得しています。現在、栄区のほかにも神奈川県厚木市、東京都豊島区、長野県箕輪町、小諸市などのコミュニティがセーフコミュニティ認証取得に向け活動しています。



さて、亀岡市の実践を見てみましょう。

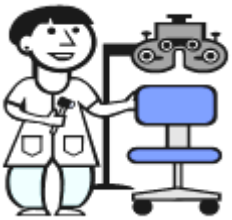
①住民体操による行政間の連携

消防署や警察署では、足腰が弱い高齢者が火災の際に逃げ遅れたり、道路の横断中に信号が代わってしまい交通事故に遭ったりする事例が多く課題となっていました。一方、亀岡市の保健所では転倒予防体操として「元気づくり体操」が行われています。そこで、連携の取り組みが始まりました。これまでにはなかったことですが、保健所に署員が出向いて研修を受け、署員が防火訓練や交通安全教室の際に市民に向けて体操を指導するといった活動につながりました。



②子ども出迎えデーから市民一斉出迎えデーに

どこの自治体でも「子どもの安全見守り隊」や「子どもパトロール」などが行われていますが、亀岡市ではそれらに加えて、皆がそれぞれの時間を工夫して見守りを行っています。「主婦なら、毎日のお買いものの時間を下校時間に合わせて」「家の前の花木の水やりの時間を登校の時間に合わせて」「散歩するなら登下校の時間に」など、市民ひとり一人の小さな活動がついには「市民一斉お迎えデー」に発展しました。



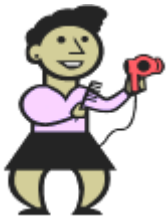
セーフティプロモーションって？

　セーフティプロモーションとは、地域の住民が平穏に暮らせるようにするため、事故や暴力及びその結果としての外傷や死亡を、部門や職種の垣根を越えた協働による科学的に評価可能な介入により予防しようとする取組のことです。

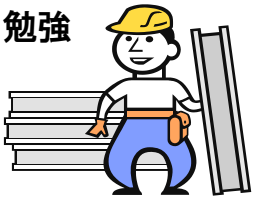
栄区にも安心のまちづくりの取り組みが！

　横浜市は昔から行政と市民が協働して街づくりをしてきた風土ゆえ、期せずともセーフティプロモーションに類する活動がたくさんあると思います。もちろん栄区にも安心、安全の取り組みがたくさんあります。

①Nサポーターネットワーク桂台

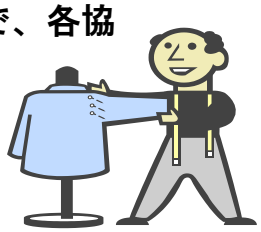


　高齢化が進み、認知症の方が増加するにつれ、この病気を患う方の事故も年々増加していますが、家族や地域の方たちがこの病気を理解し、暖かく見守ることが認知症の方が安全に安心して暮らすための礎になります。今年 3 月 7 日に開催した認知症サポーター養成講座に参加された有志の方 30 名で 5 月 16 日に発足したばかりの「Nサポーターネットワーク桂台」。まずは“認知症”を知ることから始めようと、同日に実際に認知症の方の介護に携わっている施設の職員さんを講師に招いて勉強会が行われました。今後も認知症の方への理解を深め、また日常の関わり方について学びながら、誰もが安全・安心なまちづくりを目標に頑張っています。



②徘徊高齢者の SOS ネットワーク

　認知症になっても安心して暮らせるまちづくりとして「栄区徘徊高齢者 SOS ネットワーク」があります。これは、区役所と警察、消防署、地域ケアプラザ、郵便局、公共交通機関が連携をとって、認知症のある高齢者の方が徘徊（はいかい）で行方不明になったとき、できるだけ早く発見・保護する仕組みです。徘徊は、脱水による衰弱や交通事故、転倒骨折など命にかかわる場合があります。いないと気づいた時点で、栄警察と申し込みをしたケアプラザに連絡することで、各協力機関に連絡がいき、発見・保護に協力します。このような取り組みの一つ一つが、認知症でも安心して暮らせるまちづくりにつながっていくのではないかと思います。（障害者の方にも行方不明になった時、捜索するネットワークがあります。）



　ふたつの高齢者にかかわる活動の取り組みを紹介させていただきましたが、認知症高齢者に関するさまざまな取り組みや活動にあっても、それぞれの団体が手を結び協力をすれば、より広い範囲で傷害や事故の予防ができるようになるかもしれませんね。
　まだ始動したばかりのセーフコミュニティへの取り組みですが、ぜひ皆で関心を寄せ、学ぶことからが活動のスタートになると思います。

介護グッドストーリー

みんなの介護 その一

介護グッドストーリー、このコーナーは介護に携わる方から聴いた心温まるお話をわたくし大井がご紹介するコーナーです。

介護に携わる皆さんは、それぞれの節目節目においてさまざまなご決断をされることと思います。後悔のないように、悔いの残らないようにと思っても、そこには簡単に割りきれない思いがたくさんあることと思います。今回、ご紹介するお話は、住み慣れた場所で暮らすことの意味を改めて考えさせられ、そしてご家族の思いが、温かい出会いを生み、育むという事を教えてくださいました。今回の主人公は長崎のお生まれなので大河ドラマの竜馬伝にあやかり、福山さんとしておきましょう。

夫婦仲の良かった福山さんは、奥様に数年前に先立たれてしまいましたが、一人暮らしになっても、デイサービスに通いながら生まれ故郷の長崎でお元気に暮らしていました。歴史のある港町長崎のデイサービスは一味違います！早朝、水揚げされた地元の魚がその日の膳に上り、長年親しんだ生活が一番！と古い民家を改造した建物の中にはベッドは置かれておらず、足腰の弱った方でも畳の上での生活を続けていらっしゃいます。〇〇ケアなどというしゃれたものではありませんが、不思議な事に皆いきいきとしています。

しかし、その福山さんに転機が訪れます。少し、物忘れがあらわれて一人暮らしが心配されるようになってきたので、横浜在住の長男のところに身を寄せることになったのです。

福山さんは、ご長男の自宅近くに新しく完成したグループホームに入る事になりました。しかし、完成したての新しいホームでの生活はいくら親切な職員さんがいるといってもどうしても馴染めないものでした。そのためか、これまでどのグループにいてもみんなを和ませていた福山さんの性格は一変し、ホームの職員はもとより家族に対しても心を閉ざすようになりました。体調もみるみるうちに悪くなり食欲は減退、体力も落ちて、とうとう誤嚥性肺炎を患い、入退院を繰り返すようになってしまいました。家族は毎日のように病院に付き添い、リハビリをするように本人を励ましたり、積極的な治療をしてもらえるようにドクターに掛け合いました。本人が元気になるようにあらゆる手段で、一生懸命頑張ったのです。

「横浜に来るまでは元気だったお父さんを、引っ越したことをきっかけに死なせられない。」家族みんなが福山さんの事を思い悲痛な気持ちでいました。しかし、そうした努力も報われず、体調はさらに悪化して、常時酸素吸入を行うようになりました。主治医からは「いつ何があってもおかしくない状況である」と宣告されてしまいました。

ある日、こうした状況を聞きつけ、以前に長崎で利用していたデイサービスの施設長さんが本人を訪ねました。

そして、その施設長さんは、迷うことなく生まれ故郷の長崎で静養されることを提案されました。ご家族は本人の状態を考えると非常に迷われました。しかし、「これまで最善を尽くしてみたが本人の状態が良くならない。もし最後を迎えるのならば、住みなれた故郷が一番ではないか？」と長崎への帰郷を決断されました。けれども、体調が悪化し、医師から病状が芳しくないことを宣告されている高齢者が何百キロも離れた故郷に帰るわけですから、その準備も容易ではありません。主治医に健康状態の確認を依頼したり、空港までの送迎の手配をしたり、長崎のグループホームでの受け入れ態勢を整えることなど、帰郷するまでのすべての段取りをようやく行いました。そして、移動中は看護師である施設長さんがずっと付き添ってくださったのです。そして、奇跡が起こりました。長崎に戻ると福山さんの体調は瞬く間に回復し、いまでは季節ごとの行事に参加されるなど、福山さんはグループホームでの生活を楽しまれています。家族も遠距離ながら出来るだけ本人に会いに行くように努力されており、ご家族と一緒に外食に行くことを福山さんも何よりの楽しみにしているということです。

この話の語り手である御嫁さんが「本人のために、どうすることが一番なのか？という思いが家族みんなの胸にいつもあった」と繰り返しお話されていました。深いいお話ですね。